

幼児の問題行動の発原因 (1)

女子聖学院短期大学 西方 毅

【目的】

乳幼児期の母子関係および育児の形態が子どもの発達に大きな影響を及ぼすことは、すでに多くの研究により指摘されている。しかしながら、具体的にどのような親の行動、態度、あるいは親の性格などが複合的に子どもにどのような影響を与えているかについての総合的な検討はそれほどなされていないように思われる。そこで、子どもの人格の発達に関して、特に、幼児期に生じることの多い問題行動を中心に、それと関係する親の育児行動、性格などの関係をより深く検討するためにこの調査を行うことにした。今回の調査は、子どもの社会性の発達と問題に関するパイロットスタディであるが、かなり興味深い資料が得られたので発表することにした。

【方法】

- ・調査法：子どもの行動、親のしつけ行動、性格などに関する43項目の質問で構成した質問紙を、幼児を持つ母親に配布、回収
- ・対象：関東近県の住宅地に住む幼稚園児(2年保育年少、年長)計261名

表 1

	年少	年長	合計
男子	44	61	105
女子	71	85	156

【結果と考察】

得られた資料は次の2点から分析した。(1)子どもの社会性、(2)母子の接触密度

この分析を実施するに当り、次のような処理を行った。質問項目の中から特にその特性に関するものを4項目ずつ選び、その回答に0～2点を付与し、4項目得点の合計を求める。各特性の合計は最低が0点、最高が8点となる。平均は次の通りである。

子どもの社会性：5.29

母子の接触密度：5.44

次に、この平均点を基準に、子どもたちを高得点群と低得点群にわけ、それぞれ全項目について集計し比較することにより行う。その結果の概要を以下に示す。

(1)子どもの社会性

高得点群と低得点群の回答率に有意差が見られた項

目を以下に示す。

表 2 (上段:高社会性群 下段:低社会性群)

	a	b	c
乳児期の機嫌(笑う)	63.1	35.7	1.2
***	38.5	53.8	7.7
乳児期の人見知り	19.0	22.6	58.3
***	29.7	34.1	36.3
乳児期の睡眠の深さ	13.1	23.6	63.1
**	5.5	38.5	56.0
危険に対する不安	16.7	70.2	13.1
***	31.9	50.5	17.6
けがに対する不安	15.5	45.2	39.3
**	19.8	65.9	14.3
医者に対する不安	67.9	31.0	1.2
*	58.2	35.2	6.6
遊ぶときの親との距離	0	60.7	39.3
*	1.1	74.7	24.2
迷子になることへの不安	42.9	50.0	7.1
***	19.8	52.7	27.5
乳児期泣いた時の対処	31.0	57.1	11.9
***	48.3	49.4	2.2
外出時	16.7	41.7	41.7
*	12.1	30.8	57.1
いじめ	4.8	44.6	50.6
*	12.2	51.1	36.7
就園前の友だち	13.1	46.4	40.5
*	16.7	58.9	24.4

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.005

要約すると、高社会性群(社会性得点の高い群)の子どもは、乳児期によく笑い、人見知りが少なく、良く眠っている。また、幼児期にも、高いところや暗いところ、また病院に行くのを怖がるのが少なく、けがをした場合もさほど不安がらないという傾向を示す。遊ぶときも親から離れて遊び、また、デパートなどに行って親の姿が見えなくとも不安を感じる事が少ない。親の育児行動として特徴的なものは、乳児期、子どもが泣いてもすぐに抱くのではなく、時には放っておくこともあり、外出時にはベビーカーに乗せて外出することが多いといったことなどである。

子どもの社会性の発達に関しては、幼児初期の家庭外社会との接触経験が影響することが指摘されている。しかし、上記の結果は、乳児期にすでに、子どもの社会性発達を方向づけるような条件が存在していること

を示している。すなわち、生得的要因としての安定した心理・生理的要因と、安定した母子関係の要因である。良く笑い、良く眠り、人見知りが多く、不安が少ないといった行動傾向や反応傾向は、子どもが将来社会と接触するとき良好な関係を築くための基礎になるのであろう。

このことは、いくつかの項目のクロス集計の結果にも表れている。乳児期に母親との分離に対する不安が強かった子どもは、幼稚園入園時にも、分離不安を強く示す傾向がある（5%水準で有意）また、乳児期に分離不安をあまり強く示さなかった子どもでは、幼児期に公園やデパートで親の姿が見えなくなってもあまり不安を感じる事が少ない（それぞれ5%、1%水準で有意）

(2) 親子の接触度

高得点群と低得点群の回答率に有意差が見られた項目を右に示す。

要約すると、高接触群（母子の接触得点の高い群）では、乳児期に泣くことが多く、眠りが浅いといった現象に加えて夜泣きも多く見られ。また、母親の姿が見えないと不安を示す傾向がある。この傾向は幼稚園入園時にも見られ、登園に不安を示すことが多い。同時に、他の子どもに対してもすぐに接近しようとせず、遊ぶときも親の側で遊ぶ傾向が見られる。幼児期になっても親と同じ寝具ないし親の寝具の側で寝ることが多く、離乳、排便の予告もやや遅い傾向がある。

一般に、乳児期における母子の接触度が高いことは子どもの社会性の発達において正の作用をもたらすと考えられる。しかし、今回の調査は、母子の接触度の高さに関しては、いくつか検討すべき問題があることを示唆している。

一つは、母子の接触密度が、母親の育児に対する知識や方針によって決まるのではなく、子どもの心理・生理的特性と、母親の性格特性により受動的に決定される傾向があるのではないかとということである。高接触群の子どもは乳児期に泣くことが多く、眠りも浅い。また、高接触群の母親では、自分の性格として「きちょうめんである」「ユーモアがあるほうではない」と自己評価するものが多かった（有意差の検定なし）すなわち、高接触群の母親は、子どもとのふれ合いの重要性を意識しているからでなく、子どもがよく泣き、また、それが気になるからあやすのであり、添い寝するのである。この逆は、低接触群の母親についても言える。

もう一つは、高接触群の子どもでは、幼児期になっても親との接触密度が高いことである。このことはクロス集計の結果からも裏付けられる。最も典型的なのは添い寝である。乳児期に同じ寝具で添い寝していた親は、幼児期になっても同じ寝具で添い寝することが多い（0.5%水準で有意）これは、乳児期に添い寝する習慣ができ、解消されないまま幼児期に至っていることを示す。このことは、乳児期の母子の接触度の高さが、子どもの自立を妨げる方向に作用する可能性を示唆するものである。

以上の結果は、乳児期の母子の接触密度の高さと子どもの社会性発達の関係についてはいくつか検討しなければならない問題があることを意味するように思われる。今後の課題として追求したい。

表 3 (上段：高接触群 下段：低接触群)

乳児期の機嫌（泣く）	29.3	30.4	40.2
**	13.4	39.0	47.6
乳児期の分離不安	8.7	60.9	30.4
**	20.7	56.1	23.2
乳児期の夜泣き	17.4	34.8	47.8
***	4.8	28.9	66.3
乳児期の睡眠の深さ	15.2	32.6	52.2
***	2.4	30.1	67.5
幼児期の分離不安	18.5	54.3	27.2
*	12.0	44.6	43.4
他の子どもへの親近性	11.0	63.7	25.3
**	25.3	51.8	22.9
遊ぶときの親との距離	1.1	76.1	22.8
***	0.0	59.0	41.0
けがに対する不安	21.7	59.8	18.5
***	13.3	51.8	34.9
現在の子どもの就寝	42.4	39.1	18.5
**	25.3	48.2	26.5
離乳の時期	17.4	77.2	5.4
*	18.3	81.7	0.0
排便予告	15.2	28.3	56.5
*	25.6	35.4	39.0

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.005

最後に、この調査に快くご協力下さった三和学園福増幼稚園、および、若草幼稚園の職員の方々、保護者の方々に心よりお礼申し上げます。